

- 9:00 European breakfast bread and butter ベーコン、スクランブルエッグ、フルーツ、  
勿論、ラオコーヒーも。
- 10:00 サムソン川を渡り、バンガロー村を見学。  
ここで思案の結果、同行家族がレンタバイクを借りてくることとする。それ以降、バイクで移動することに決定。  
待つこと30分。彼女がバイクを借りて到着。  
バイクで移動して先ず、Cave 探索に向かう。乾季の休閑田を走って、道なき道のルートに Lusi Cave を目指す。乾季の田の切り込まれた畦を乗り越えてバイクを進める。この畦の切り込みが、後ほど、重要な意味を持っていることに気付くことになる。  
Cave へのルートは竹竿に取り付けられた簡単なフラッグで示されている。道中約4 Km。徒歩で向かうツーリスト、自転車で帰ってくるツーリストに細いルートで出会う。  
Cave 入口に到達。3人の現地のラオス人が手持無沙汰に待ち構えていた、そんな様子である。道中、植林された林の中の、ことの外の冷気が印象に残る。この樹種の植林は各地で見られた。これは確認できずじまいに終わる。が、重要な意味を持っているように思える。  
入場料を払って、ガイド付きで Cave に入ろうとするツーリスト6人が集まり、いよいよ、これらの者を一つのグループとして、待ち構えていた内の二人がガイドになって案内することとなる。  
変哲もない鍾乳洞であるが、かなり（相当の）大規模なものであることが判る。安全なルートを手すり、階段でしつらえ、照明まで完備している日本の観光スポットの鍾乳洞とは大違い。バッテリーにつないだ照明器具を2人に一個の割で渡される。この照明器具も内2個がバッテリー切れを起こし、使用できなくなるのであるが。  
チョットシタ Tough Adventure である。  
木と竹と針金で作られた手すりや梯子はそれなりに設置されているが、強い洞窟内の湿気で年1回は取り換えなければならないとのこと。梯子に使われていた朽ち果てた材がその場に捨てられているのを見て少し不安がよぎる。  
国の違いを超えても、鍾乳石の形を何かになぞらえて名称を付けて楽しむのは、変わりがないようだ。曰く、女陰、男根、恐竜、・・・などである。恐竜と言うのは、ダイナソア一と言うよりエレファントと言うのが地域性から言っても、適当ではないかと付言しておいた。  
相当に奥まで入ってから、水の出現である。ここから奥は、膝までの水位の処、1か所、胸までの水位の処1か所ある。これを超えると滝の音の聞こえる、素晴らしいラグーンのところに行きつけるとのこと。  
オイオイ、それは待てよ！同行のツーリストすべて、御免をこうむる意向。これにて退散。この場で Smoking Time 小休止の後、元に戻ることにした。吸い殻はそこらに捨てておけとのこと。  
再び税の話であるが、ここでも、過去の日本の映画館のチケットのように、公的な検印が押された連番号のチケットもぎである。案内人との交流の後、再び、街まで帰る。
- 12:30 河畔のレストランに入り、手を洗って、一息着き、サンドイッチとレモネードで昼食とする。帰る途中、ゲストハウス群の汚水がそのままナムソン川に放流しているのを見る。
- 15:00~ Hmong の村を探索することとして、先ず、国道のガソリンスタンドでガスを補給し新設の有料橋を渡って、埃の舞い上がる道を約4~6 Km 先の集落を目指す。  
Nathone や Phone Ngorn などの集落である。

帰途、農婦に出会い、水田の灌漑施設の話や牛の放牧の話を何回も聞く。時刻は午後5時半を廻るころ。バイクで帰路に就く若者の姿や徒歩で勤めから帰る5～6人の婦人のグループに出会う。

現金収入を求めて、町へ出る様子がうかがえる。同質的な村落社会が徐々に変わりつつあるのか？

18:30

ホテルに帰り、シャワーで泥を落とし、夕食へ。  
 レンタバイクの借り上げ時間を有効に使って、街外れまで探索。  
 レストラン (BAN LAO RESTAURANT) で夕食。

Spring roll ,fried rice,スパゲッチ、ビアラオ  
 街を散策、前夜から気になっていた屋台のホットケーキを持ち帰る。  
 綿の帽子を買う。これ以降、この帽子を愛用。

22:00

ホテル帰着。



←朝の陽光を浴びて特異な山容はミステリアス  
 朝は涼しく、日本の9月頃の感じ。しかし、今日も暑そう。

↓ホテルでの朝食風景↓



【ナムソン河の木橋を渡って、バンガローへ。】



←ツアーの案内看板

バンガローを经营管理する者。ここにもバスケットの案内。扱う場所によって微妙に価格に差が。 →



←典型的バンガロー施設。  
 トイレ・シャワーは共同

安価なバンガローに宿泊し、日陰で読書しながら自由に過ごすのが欧米人ツアーリストのやり方。 →





← 長期滞在者には縫製の需要もある。Singerの刻印が懐かしい。トリが歩いているのは当たり前。



↑ 犬が居るのも当たり前。飼い犬か野良犬かの区別がつかないのが当たり前。こんなものをウオッチングしながら同行家族の到着を待つ。



Cave 入口、案内処

← どこにでも宗教施設。  
どこにでも犬が居るのが当たり前。  
→



← 魚網の繕いをしながら客待ち。興味を示すと実演してくれた。ありきたりの投網。ナムソン川で漁か

我々に次いで、ツーリスト現る。彼らとともに、Cave にはいることとなる。手書きの看板に Luci Cave。入場料 8000K、ラグーンへは 15000K、ここへは、ガイドなしで不可とある。例の徴税チケットである。 →



↑ 得意げな案内人。片言英語で名調子。暗闇。光は写真フラッシュのため。↑

鍾乳洞内風景・暗闇の中フラッシュの光で



←ここから先、膝までの水、胸までの水を超えてラグーンへ。  
煙草休憩。この先断念。



← 案内処から Cave 入口までは急峻な岩肌。竹の手すり。木の梯子が針金で結えてある。 →





← 案内人としばしの交流。  
近くに住んでいるとのこと。  
トイレは？と聞くと、林の中とのこと。 →  
そして再び、客待ち。のんびりと日が過ぎていく。



休閒地となっている水田が通路となっている。通路ではない。踏みならすから通路になったもの。  
緩い傾斜地の水田。その畦か切り込まれた箇所がある。これを踏み越えてバイクを走らせる。この切り込みは畦の適度な高さで切られている。水田として水を張る時、必要な水位になれば、次の田に流れ出す、所謂、田越しに灌漑する工夫であることが判る。午後の村でも感じることであるが、休閒—耕作のブロック毎のローテーション、乾季・雨季の関係、家畜を入れる土地利用、田越しの灌漑など、村に土地利用調整機能があるとしか考えられない。腰高に刈られた稲株に牛の放牧。排泄物による地力の維持増進。よく考えられた農業生産方式である。小屋は農作業休憩所か農牧牛の監視舎。



↑ 牛放牧の監視小屋か、農作業休憩施設か？



木橋を渡ると左写真の露地に入る。  
右はその前に開ける町並み。本通裏。



↑ 木橋を渡って町中へ。バイクは同行  
家族

木橋を渡り露地に入る手前で、ゲストハウス群の排水がナムソン川に無処理のまま放流されているのを見る。

泡立つ排水を見て、露地を通り抜けた右手に右の看板。

看板には、小市域開発事業。排水路（Drainage これには下水の意味もある）整備事業。事業開始05年2月11日。契約金額17億K（日本円で2500万円）。発注者 市街地開発公社。施工管理者 OOコンサルタント。請負業者 KHAMFONG 道路橋梁建設会社。とある。排水路はあるが下水終末処理施設が見当たらない。

